

AOB Seminar

講演者名: 神沼 克伊 博士

所 属: 国立極地研究所・総合研究大学院大学

開催日時: 2013年2月27日(水) 14:00 - 16:00

場 所: 地震・噴火予知研究観測センター 別館 第一会議室

講演題目: 「M9シンドローム」と「抗震力」

東日本大震災が発生したとき、行政も自治体も一部の研究者も防災の専門家と称する人々も、みな同じように「想定外」を連発した。このとき私が感じた疑問は「本当に想定外と云えるのか」ということだった。想定外を口にすればそれですべてが許されるという風潮であった。

その後は「最悪のシナリオ」が語られるようになった。1000年に一度起こるかどうかなどというように極めて稀にしか起こらない現象が、あたかも近い将来発生するかの印象を与える論調が広まった。私はこの風潮を「M9シンドローム」と呼ぶことにした。

M9シンドロームの典型は政府による南海トラフ沿いのM9.1の超巨大地震の予測である。死者32万人を推定するのに加わった研究者は、その直後には死者40万人の私見を発表している。

神奈川県では相模湾沿岸に襲来する津波予測を、それまでの関東地震の6mから「鎌倉大仏の仏殿を流した津波で被害予測をしろ」という知事命令が発せられた。その結果14.47mという数値が発表された。この対応には二つの誤りがある。

第1は鎌倉大仏の仏殿が津波で流された史実はない。

第2は仮に仏殿があったとしても15m程度の津波では流されない。

このようにM9シンドロームは史実がないことを使ってまで住民に不安だけを与えている。

これまでは関東地震は1923年の大正関東地震と1703年の元禄関東地震の二つと考えられてきた。なぜ二つだけで、その前の関東地震が起こっていないのか不思議でもあった。

しかし、鎌倉大仏と津波とを調べていくうちに、明応4年(1495年)と仁治2年(1241年)にも起きていた可能性が高いことが明らかになった。

M9シンドロームの特効薬として「抗震力(anti-quake power)」を提唱する。抗震力は住民一人一人が地震に対して正しい知識を持ち、対処する力である。ただ「地震に備えろ」と云われても、実際に何をどうしたらよいのか、分からない人が多いはずである。「抗震力」には地震対策の基本がまとめられている。抗震力という形で説明することにより、多くの人々が「地震への備えの内容が理解できた」と評価してくれている。ただしその内容にはまだ検討の余地があるとも考えている。忌憚のないご批判を歓迎する。

最後に日本の地震予知について若干の私見を述べる。